Coggle, Paul, *Do You Speak Estuary?* (Bloomsbury, 1993).

Levey, David and Tony Harris, 'Accommodating Estuary English', *English Today* 71 (Cambridge University Press, 2002), pp. 17-20.

Maidment, J. A., 'Estuary English: Hybrid or Hype?', Http://www.essex.ac.uk/speech/teaching-01/474/maidment.html

Rosewarne, David, 'Estuary English: tomorrow's RP?', *English Today* 37 (Cambridge University Press, 1984), pp. 3-8.

---------, 'Pronouncing Estuary English', *English Today* 40 (Cambridge University Press, 1994), pp. 3-8.

(『文学論叢』と *English Today* のバックナンバーは大学の図書館にあります)

時代の奔流に抗して

法学部
竹中　克英

アメリカ大統領ブッシュの顔をたびたびテレビで見，その演説を聴く。すると，なぜかとたんに不快感に襲われる。かつて1960年代のアメリカ映画で先住民をまるで射的の的のように撃ち殺していた開拓時代のならず者たちを思い出す。品性も教養も感じ取ることができないのだ，残念ながら。

わたしたち地球人は，確固たる安定した大地に不動の姿勢で立っている，と錯覚している。だが，事実はそうではない。大地はすさまじい速度で回転しつつ，宇宙空間を巨大な楕円を描いて駆け巡っている。そして，わたしたちはまるでジェットコースターの乗客のようにこの「不動」の大地に乗り込んでいる。この構図を実感するには，地球外宇宙空間のどこかに視点をすえて，地球を観察すればいい。「それでも地球は動いている」とガリレオがつぶやいてから数世紀。わたしたちの踏みしめる足下の大地は決して不動ではないのだ。この物理的速度の脅威を実感できないのは，わたしたちが自分と同じように地球上の一切の物体が同じ速度で移動していることに起因する錯覚にとらわれているからにすぎない。

フランツ・カフカは「木々」と題する小品で次のように記している。

「なぜならぼくたちは雪のなかの木の幹のようなものだから。それは滑らかに雪の上に載っ

ているように見える，ほんの一突きで押しのけることもできるだろう。いや，そうはいかない，木の幹は大地とかたく結びついているのだから。しかし，見たまえ，それすらもそう見えるというにすぎない。」

時代という運動体もまた同じである。この奔流の中に身をおくかぎり，その速度を計ることはできない。18年という歳月を隔てて，昨年１年ドイツの地でふたたび生活し，時代がこの社会を運び去っていったその猛烈な速度を実感せずにはいられなかった。1986年から2004年の18年は世界の急激な変貌を感じさせるのに十分すぎるほどの長さだ。1989年の東欧社会主義体制の崩壊とともに，資本主義はヨーロッパをさながら巨大なブルドーザのごとく荒々しく地ならししていった。アルフレート・デーブリンが長編小説の舞台とした「ベルリン・アレクサンダ広場」に立って，周囲を見回してみればいい。そこはもうドイツでもなければ，ヨーロッパでさえない。感じられるのはただ個性をなくした巨大都市空間と資本主義的繁栄の虚像のみ。ミュンヒェンの市役所庁舎の前に群れ集う人々の背後には，カールシュタット，Ｃ＆Ａなどの百貨店群の建物。名古屋の栄の町並みと変わりない。観光客はそんなところに見るべき文化がないことをよく知っている。彼らの視線はただ一点，市庁舎の巨大な建物の時計塔に注がれている。

世界が，あのとき，時代のジェットコースターに乗り遅れまいと必死で乗り込み，一様に変貌を遂げた。わたし自身がこよなく愛するチェコの首都プラハの変化もすさまじかった。二枚の写真がある。いずれもプラハの街中で写したものだが，この18年の時代の変化を写真は歴然と物語っている。この街で20世紀の初頭を生きたカフカをわたしは18年前に写した写真のほうにいっそう強く感じる。社会主義はこの街を無残にも荒廃させたかもしれない。しかし，社会主義は他方で一切の変化を，変貌を遮断し，かつてカフカが生きた時代のプラハをそのまま残した，とも言える。そのカフカの生家は，悲しいことに，レストラン・カフカとなっている。詩人たちが集い，プラハの文化の中心でもあったカフェ・アルコも跡形もなく消えていた。18年前，街をあちこち歩き回り，偶然たどり着いたカフェ・アルコで飲んだ苦いコーヒーの味もそのときの感動も，もう二度と体験することはできない。当然なのだ。時代は社会や町を，そして人間さえをも激しく変貌させ，二度と同じ場所に連れ戻すことはないのだから。

わたし自身もその間に日本という社会において急速な変貌を遂げたはずなのだが，日本といういわばヨーロッパにとっての地球外宇宙空間に立って，18年前と今日のこの世界の時代的距離を計測してみると，ドイツが想像できないほどの変貌を遂げたことがわかる。ドイツだけではない。世界がすさまじい速度で走り去る時代のジェットコースターに運ばれているのだ。しかし，わたしたちはだれもこの狂気を語ろうとしない。

あなたの住む町や村にマクドナルドとケンタッキー・フライドチキンがありますか？もしなければ，マック度０。残念ながら時代の流れから取り残されているのです。マックとケンタッキー，それがなければ話になりません。北京でさえもう10年以上も前にケンタッキー一号店が開店しています。それらは自由と民主主義，ついでに資本主義の象徴ですよ。ただし，アメリカ式の。ただし，あのジョージ・ブッシュ式の。そういえば，２年前に訪れた北京の王府井ももう北京でも中国でもなかった。

ドイツでドイツらしい生活を，と考えて日本を発った。時間さえあればあちこち見境もなく駆け回って，お，ドイツはすごい，へえ，これが世界史に出てきた城なんだ，などと以前のように旅行者気分で時を過ごすのではなく，静かに１年を過ごしたかった。粗末な自室の机に向かって読書に時間を費やし，近くの森の中を時々は散歩し，日本ですっかり擦り切れてしまっていた精神を癒すために，時代の流れからはずれて，真性の時の流れを感じたいと思った。半ばこの願いは実現し，だからここで求められたまっとうな体験談など何ひとつ書けない生活ができた。恩師ヴァルター・ファルク教授の亡き後，つつましく静かに暮らす夫人をマールブルクに訪ねたときだけが救いだった。ただここだけで18年前のドイツの生活を感じることができた。街から数キロ隔てた郊外の山の中の教授宅もその周囲の小さな村も，時代を離れて静かにつつましくそこにあった。

（ファルク教授宅）

そしてもうひとつ思い出した。プラハ中心街でとまった宿は受付の少女の話では15世紀の建物だという。そういえば，４階の部屋まで重いトランクを苦労して引き上げた狭い回り階段の途中の２階に，まるで中世の牢獄を思わせる鉄格子の扉が嵌っていて，出入りするたびに鍵を開け閉めしなければならなかった。だが，不思議なことに，この宿での３晩は妙に落ち着いて眠ることができた。

時代を批判し，文化を語ろうとするときの危険は，そのつもりがなくとも，主張がロマン主義的（いや，保守反動的というべきか）傾向を帯びる点にある。かつて「近代の超克」を唱え，日本ファッシズムの精神的支柱となった一派だけでなく，そもそもロマン主義運動そのものが鋭い時代批判性を備えながら，反時代的・反歴史的傾向を強めざるを得なかった。しかし，果たしてそうなのか？時代が誤る，ということをわたしたちは近代史においてさえたびたび経験してきたのではなかったか？問題は，時代に内包されているさまざまな意味可能性をわれわれがつかみ得ないまま，まるでひとつの可能性しかありえないかのように「錯覚」しているだけでなはないのか？

テロリストに対するアメリカの正義の戦いに加担しない国はテロリスト国家とみなす，とブッシュはイラク戦争を開始する前に世界を威嚇した。フセイン打倒後の今日の混迷のイラク状況を目の当

たりにして，イラク国民の抵抗運動をなおもテロリスト呼ばわりするブッシュへの不快感がますます募る。彼にとっては正義も平和も，だから自由も民主主義もひとつしかありえないのだ。アメリカ式正義，いやブッシュ式正義，ブッシュ式平和，ブッシュ式自由，ブッシュ式民主主義だけしか。そして，それらを支えるブッシュ式資本主義の不気味にわたしは戦慄せざるを得ない。

この時代とは別の姿をした時代，この社会とは別の姿をした社会に静かに生きてみたい。それがドイツへ出かける１年前のわたしの願いだったし，いまの願いでもある。時代からはずれることができないのなら，せめてこの時代の趨勢に加担しないで生きることが。

カフカと第一次世界大戦の関係を追及することがドイツ滞在の研究テーマだった。そのカフカは戦争のただ中にあって，生涯でもっとも創造的で生産的な時期を過ごした。彼が戦争について直接発言することはほとんどなかったし，戦争を文学的に形象化することもしなかった。1914年９月13日，その彼が日記に記している。「戦争と結びついている考えは，それらが実にさまざまな方面で僕を苦しめる点で，F〈フェリーチェ〉のために生じたかつての憂慮に似ている。」戦争はこの直前に，そして彼が長編小説『審判』を書き始めた直後に勃発した。なぜ彼は戦争を書かなかったのか。彼にとって戦争は直接的な殺戮・戦闘の問題ではなく，時代に対する人間の基本的姿勢と倫理の問題にほかならなかったからだ。この倫理的問題を究明し，カフカと戦争の関係を明らかにしたのが，恩師ヴァルター・ファルク教授だった。

わたしたちはいまほど時代との関わりを倫理的課題として取り組むことを余儀なくされているときはないような気がする。

“政教分離の再確認を！”

法学部
河原誠三郎

物の生産手段が限られ生きることが困難だった大昔，不幸を見かねて色々な宗教が生まれたのだが，言葉とわずかな施ししか救いの手段がなく，したがって，どの宗教も現世の生を諦めて，あの世の幸せを求めよ，とその幸せの確たる証拠も示し得ないまま説教せざるを得ず，人はなお欠乏のまま放置された。

神などという荒唐無稽な観念を編み出した宗教家たちは，現世を諦めよと説きながら，他方大ぴらに現世を享受してきている。その欺瞞の大きさはヨーロッパの教会の壮麗さ，儀式の華やかさに示されている。京都などの寺社数の多さと土地建物の壮大さには驚愕する。宗教家たちは王侯貴族の生活を夢見，その優雅な生活の永続を願っているのであろう。そして，世俗の勢力と組んで，自己の勢力を広げることだけに専心してきている。宗教争い，宗派争い，勢力拡大争いは今だに続いている。

人間がある知恵に達するには，長い時間と経験が，とりわけ失敗の経験が必要だ。大多数の人間が無知無学だった頃できあがった古い古い教典になお頼って，神は全能であると言いつつ，だが神の救いは恣意的である，救いたいと神が思えば救われる，熱心な信者であっても全てが救われるわけでない，などと神の無能力を自ら認めたような逃げ道を作っている宗教，そのようなものに人々の運命を預けるわけにはいかないだろう。「王権神授説」などを唱えて自己と家族との繁栄と永続